厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
沖縄県における男性同性愛者へのHIV感染予防介入に関する研究

沖縄県で生活する男性同性愛者のライフストーリー研究

研究代表者：加藤　慶（横浜国立大学大学院環境情報研究院）

研究要旨

非大都市圏である沖縄県で生活する男性同性愛者は、どのような生活を送り、そして自らの生活をどのように意味付けて生きているのだろうか。これまで沖縄県における男性同性愛者当事者の生活は研究されてはいない。その生活を把握することは、沖縄県におけるHIV感染予防介入を効果的に行うための基礎資料となると考えられる。そこで、当事者2名からのライフストーリーの聞き取り調査を行ったものを掲載した。

A. 研究目的

非大都市圏である沖縄県で生活する男性同性愛者は、どのような生活を送り、そして自らの生活をどのように意味付けて生きているのだろうか。これまで沖縄県における男性同性愛者当事者の生活は研究されてはいない。その生活を把握することは、沖縄県におけるHIV感染予防介入を効果的に行うための基礎資料となると考えられる。そこで、当事者からのライフストーリーの聞き取り調査を行った。

B. 研究方法

研究方法として、質的調査に属するライフストーリーの聞き取り調査を行った。質的調査は、量的調査と異なり、そのデータ単独をもって一般的結論を導きだすものではなく、人間にとっての体験の意味付けを重視し、語り手に寄り添いながら、語り手と聞き手により、物語を構成していくものである。そのため、客観性を担保するのではなく、きわめて主観的であることを自覚したうえで、分析を行うことが必要となる。

そこで本研究では、沖縄県における男性同性愛者へのHIV感染予防を、当事者により密に適するかたちで行うことを目的として、沖縄県で生活する男性同性愛者の当事者の6名、及び比較対象とするために現在、東京都で暮らす男性同性愛者の当事者 1 名からのライフストーリーの聞き取り調査を行った。聞き取りにおいては、ICレコーダーを使用して語りを録音し、文章化した。

なお、語られたライフストーリーは、すべてプライバシーに属するものである。そのため、日本社会学会倫理綱領に基づく研究指針に従って人権と社会正義の尊重をはかった。具体的には、本報告書掲載前に、文章化できたものを、語り手本人にお渡しし、文章内容確認と改めての掲載確認をしている。

お話をうかがう際に、事前に筆者からは口頭にて(1)お話いただく際には IC レコーダーにて録音させていただくこと、(2)お話いただいた内容は、お話いただいた本人に属するものであることから、お話いただいた後に修正や削除の希望に応じること、(3)テープおこしを行って文章化したものは、学術研究目的のため、報告書や学会、学術論文として発表されることがあること、(4)お話いただいたあとに公表を希望しない場合、それも対応することを説明している。

このような研究倫理手続き上の要請により、本報告書では平成21年3月末日までに確認いただいた2名の方のものを掲載している。今回の報告書に掲載していない方の聞き取りデータについては、厚生労働科学研究による研究成果である旨を明記して、今後、論文化する予定である。

なお、本文中の〔　〕は、語りの意味を筆者で補ったものであり、補ったうえで、ご本人に意味の確認をとった。

C. 研究結果

(1)心を麻痺させました-沖縄に住む性的マイノリティ男性Aさんのライフストーリー-

Aさんは、沖縄生まれの沖縄育ちのゲイ男性である。聞き取り時点で、38 歳。家族は、ご両親と、一つ年上のお兄さんの 4 人家族である。聞き取りは、2008 年 11 月に那覇市 NPO 活動支援センター会議室において行った。聞き手は、加藤慶と金城健である。

オカマだった小学生時代

《A さん》小学校の入学から〔話をしますね〕。自分はずっとオカマだったんですけど、女の子とよく遊んだんだけど、特別そう、いじめられたりとかそういうのは。〔「オカマ〕とかって〕言われたことは何回かあったんですけど。ただ年子の兄さんがそういう、学年が上になるにしたがって。

やっぱり遊びが、女の子の〔ものだったから、〕休み時間とかでも、男の〔子は〕急になんか壁にボールを使って遊ぶとかいっちゃって、〔自分は〕とにかく男の子と遊ばない。

《聞き手 A》ピアノ習ってるとか［ききましたが］。

《A さん》はい。習っていました。それ以外では、放課後っていうか、それも近所の〔女の子たちと遊んでいました〕。なんか学校ごっこっていうのがあって、自分はいつも生徒の役で、なんかわかんないけど通知表とかももらって。でも先生役になったことはなくて、そうやってして遊んでた。学校の話したりとか。

《聞き手 A》小学生の頃ですか、初恋って？

《A さん》自分がいま思うと初恋だったんだと思うのは、小学校 3 年でした。沖縄の子じゃなかった。転校で来てた。男の子です、もちろん。同じクラスじゃなくて、隣のクラスだったんだけど、休み時間とかで見ると、なんか嬉しくて。で、その子の上の名前をちょっと、〔ノートの端とかに〕書いたりしてたの覚えてます。

《聞き手 A》自覚したのっていつですか？ ゲイっていうことを。

《A さん》ゲイとかっていうの、わからなくて。オカマっていうのはわかるんだけど、ゲイとかっていうのは本当に、自分たちのときは情報がなくて、インターネットとかもちろんないし、ゲイ本の存在も知らなかったし、とにかくもう絶対に男が好きだなって認めたっていうか、もう絶対〔その道で生きていく覚悟を〕せざるを得ないんだって決めたのが、中 3。というのは、修学旅行とかあって、すごい心配したんですよ。みんなでお風呂入ってるときに〔男の裸を見て……〕、っていうことを、すごい修学旅行の前に心配してたのはすごい覚えてて、それまではなんか認めたくないとかって〔気持ちで〕あったのに、「あれ？ あれあれ？」って思っちゃったとか、そういうのす。ゲイっていうことを知ってたかわからないけど、自分の興味は男なんだなと思ったのが、はっきりと思ったのが、中 2 か中 3 だと思います。

《聞き手 A》今では困惑とかってないんですか？

《A さん》悩みはずっと〔あります〕。それで、友達どうしでどうのこうのっていうのは、悩んだりしたんだけど、やっぱり思春期特有の、他のことでいっぱいとかそういうことのほうで〔悩んだりしたので〕、ゲイだけで悩んだりっていうような［ことではありませんでした］。

中学生から高校生時代

《聞き手 A》中学校のときとかって、なんともない？ ちなみに部活は何やってました？

《A さん》最初はバレー部にいたんだけど、やめて、吹奏楽部にはいり、パーカッションを担当した。女の子が多いところ［＝部活］に（笑）。

《聞き手 A》〔中学校は〕地元の？

《A さん》S 中。

《聞き手 A》S 中学校〔ですね〕。高校もこのあたり〔＝那覇市内〕ですか？

《A さん》うん、高校も那覇市内。悩んだというか、いい思い出が全然なくて、部活とかもしなくて、もうなんか、飲み屋［＝ゲイバー］があるとかも、もちろん〔未成年だから〕いけないけど、知らないし、〔同性愛の雑誌の〕『BADI』とかもない時代なんで、古本屋ですごい古い、70 年代ぐらいの、たまたま見つけたもの〔＝ゲイ雑誌〕をすごい大事に持ってた。〔高校では〕理系・文系って分かれたんですけど、〔自分自身は〕文系にいって、男子は〔クラスで自分以外に〕6 名。文系は男のひとが少ないので、〔自分以外のひとどうしでは〕仲良くなるひととかも〔いた〕。軽く仲いい人はいるんですけど、心を打ち解けて話せるっていうのは、〔自分がゲイだと〕自覚してからは〔できなかった〕。

《聞き手 A》沖縄では高校入学の選抜ってどうやってるんですか？

《A さん》内申書っていうのがあって、それとか、中学校のときの校内の席次。たとえば 100 番以内だったらこっちの高校とか、あと、この地区だったらこの高校、普通科だったらこの 3 つから選んでいって、自分の学力にあったのを決める。

《聞き手 A》高校のときはなんかやってたんですか？ 部活動。

《A さん》やらなかったですよ。だから、余計……

《聞き手 A》うちにこもってた？

《A さん》なんか、すごい冷めてしまって。なんでか知らない。今はもうすごいもったいないことをしたんだけど。いちばん楽しいはずの〔時間を無駄にして〕しまって。高校ってなんか、青春ドラマじゃないけど、学園祭前にクラ

スで団結して盛り上がったりとか、クラス会終わったあともお疲れ様〔って打ち上げしたり〕、ああいうのがすごい馬鹿らしく〔思え〕て、なんかみんなの輪の中に入りたいのに入れないっていうか、その宙〔ぶらりんの〕、そのままの自分が怖くて、あまりひとても関わらないようにっていうか、なんつうのかな……

《聞き手 A》どっかでバレるんじゃないかって？

《A さん》バレてるっていうか、急に友達づきあいとかが〔減った〕。意識過剰だったのかもしれないけど、親しい友達とかとかも〔いなくて〕授業受けて帰って終わり。ほんと、楽しくなかった。学校以外で楽しみがあれば、また違った。

中学のときに、すごいこう、多感な時期でしょう。あまりにもいろんなことを感じるっていうか、このままいろんなこと感じてたら、精神の均衡を保てない。〔だから〕あんまり感じないようにしよう〔と〕。いろんなことを感じすぎて怖くて。って思って、なんか、楽しいのを見ても、べつに楽しくないようなふりをしたりとか、悲しいのを見てもべつに悲しくない、とか、それが高校になって、心を麻痺させてた。

《聞き手 A》中学生で、心を麻痺させて。

《A さん》麻痺させようとした。あまりにも感じて、「感じすぎたらおかしくなるんじゃないか、苦しい」って。で、「べつに悲しい映画見ても感じないようにしよう」とか。高校になったら、そうしたのが、ほんとに〔何も〕感じなくなって、感動が薄くなるっちゅうか、「ばかじゃないの」みたいな感じで、冷めた高校生になってしまって。クラスの中でも。といって、べつに不良でもないから、サボったり、恋愛もなく、「好きなの？」って〔このような無感動な状態でも〕思うひとはいた。

《聞き手 B》どういうひとですか。

《A さん》先輩だった。〔先輩は〕よくしてくれた。〔A さんが〕弁当忘れたら、自分の分をくれたり。

高校を卒業してから

《聞き手 A》高校卒業したあとは、どういう進路だったんですか？

《A さん》北九州っていうところに、移動。

《聞き手 A》じゃあ、18 で北九州のほうに移られるわけですね。

《A さん》はい。だけど自分は、あまりにも高校が楽しくなかったから、大学生活に夢見てたんですよ。で、自分の頭の中にあったのは、東京の大学生みたいな〔キャンパスライフ〕。でも、うちは年子で、兄さんが私立の本土のほうの大学にいってて、「本土の大学はいいけど、私立は〔経済的に〕ダメ」って言われて。〔きょうだい〕2 人で〔育てるのにいっぱいいっぱいな〕普通の家庭なんで。まあ、「本土はいかせるけど、私立はダメ。東京の私立なんてとんでもない。公立ならなんとか」っていうことで、北九州にいったんだけど、思ってたよりも田舎っていうか、すごいがっかりしたのを覚えてて、標準語を喋ってると思ったら「〇〇っちゃ〔九州弁〕」とか言ってて。自分も馬鹿なんですけど、それでなんか幻滅してしまって。

〔その大学にあった学部は〕文学部、法学部、外国語学部。今ちょっと変わってるんだけど、国際関係学科とかあって。で、大学を 1 年〔次〕で中退して出たんです。わざわざ大学をやめて予備校にいったんだけど、〔次の年も大学に〕落ちて。

《聞き手 A》で、北九州を出たんですよね。〔北九州にいたのは〕1 年間？

《A さん》1 年じゃないですね。半年ぐらい。

《聞き手 A》大学やめて、すぐ東京にいかれたんですか？

《A さん》いってないですね。沖縄で〔しばらく暮らした〕。次の年の試験に落ちて、1 年間また予備校にいった。東京外国語大学にいきたくて。無茶だったんですけど、今から思うと。

《聞き手 A》東京にいかれたのはいくつのときですか？

《A さん》東京にいったのは、30 のときです。ずっとあとです。大学〔時代〕でいったんじゃなくて。

《聞き手 A》受験をして予備校いってたのは、沖縄ですね。

《A さん》そうです。しかも落ちたんです。で、なにか資格を持とうと思って、介護の資格を取って、病院で働いてたんです。

介護専門学校の学生時代

《聞き手 A》専門学校で〔の学生生活〕は？

《A さん》それが、本当に楽しくなくって、これも。冗談じゃなくて。

《聞き手 A》女の子のほうが多いですよね。介護福祉士の学校だと。

《A さん》〔全校生徒の中で男は〕10 人いるかいないか。ほんとに楽しくなかった。年齢もさまざま。高校卒業したばかりのひとが主流なんだけど、やっぱり 50 近いひともいたりとか、30 いくつのひともいたりとか。そのとき介護福祉士の〔資格が〕、〔自分は〕91 年に〔専門学校に〕入ったんですけど、できたばっかり。

できて2年目ぐらい［注:介護福祉士の資格は1987年に誕生］かな。
《聞き手A》入学したのが21ぐらいのとき？
《Aさん》今でもあれなんですけど、あんまりものを考えないで行動するところがあって、介護福祉士も国家資格だから、高齢化社会もくるし、なにか資格があったほうがいいと思って。〔でも、介護福祉士の仕事が〕オムツ換えるとかって思ってなくて。馬鹿なんですけど、笑い話じゃなくて本当に、最初の夏に実習じゃないけど〔見学に〕いったときに、すごいショックを受けて。本で読むのと実際のとはすごい違ってて、〔でも今の自分は〕大学もやめてるし、専門学校までやめたらもう本当にしょうもないと思って、卒業して資格を取ろうと決めた。
《聞き手A》専門学校のときは、プライベートはどうでした？
《Aさん》プライベートっていうか、やっぱり向こう［＝ゲイについて］はデビューとかそういうのが遅くて、25に［ゲイの］飲み屋いったのが初めてで、高校のときもすごい、灰色ではないけど〔したいなと思いながらも〕何もしなかったし。それで、専門学校ではプライベートを充実させたいと思って、「ローターアクトクラブ」っていうのがあるんですけど。「ロータリークラブ」ってあるじゃないですか、あれの青年版みたいな。18から29歳までの地域のリーダーを作ろうみたいな。で、それに入って、なんかみんなで。［ゲイ雑誌の］『BADI』が、自分が就職したときにできたのかな。
《聞き手A》『BADI』ができたのは、〔Aさんが〕23、4ぐらいのとき？
《Aさん》ぐらいですね。
《聞き手A》沖縄ですぐ手に入りました？
《Aさん》たまたまいった書店にあって。どういうわけかはわからないんですけど、とにかくあって、もうびっくりして、嬉しくて買ったのを覚えてて。で、飲み屋とかいくあれ［＝情報］は〔手に入ったし〕、これ［＝BADI］に載ってる、ビデオを売ったりとか〔してる〕ゲイショップみたいなのがあったんですけど、見に行くのは実際、25ぐらいとか。
《聞き手A》あいだが開くんですね。
《Aさん》そうですね。急には怖いっていうか、普通にまったく情報がない中でも、与儀公園にはそういう〔ゲイの〕ひとたちがおるからっていうのは、那覇の人だったらけっこう知ってて、でもそこにいくのもなんかこう、親が警察官で、ちっちゃいときから、「お父さんに迷惑かけるようなことするな」っていうのが染みついてて。

介護職としての病院勤務

《聞き手A》そのあとは、どうされたんですか？
《Aさん》専門学校卒業後、病院で働いてたんですよ。2年間、介護職として。
《聞き手A》じゃあ、25ぐらいまで。デビューしたのが25からだから、そこ〔の職場〕では何も言わず？
《Aさん》何も言わない。ただ、モーションかけられたっていうのは、病院で〔あった〕、患者さんに。しかも、おじいちゃんだったんですよ。今だったら余裕もって受けとめるんだけど、すごい嫌だったっていうのをよく覚えてて。
〔相手は〕風呂入れてるおじいちゃん。べつに風呂入れる必要もない、おじいちゃんっていうか60ちょっとぐらいなんですけど、小学校の校長先生を退職したってひとで、まあ僕が全部〔世話していた〕。そのひとべつに、介護しなくていいんですよ。歩けるし。でも「お風呂入れて」って言われて、仕事だから「はい」っつって頭洗って背中流したりとかしてたら、なんかキスしてとか〔言われた〕。自分は、誰にもやったことないから、最初がおじいちゃんでそういうこと言われて、〔自分の理想と〕違うかった（笑）。今だったら全然大丈夫なんですけど。

介護職を辞めての生活

《聞き手A》で、また〔職場を〕変わって。デビューも一緒〔のタイミング〕ですよね？ それはなんでですか？
《Aさん》仕事やめて、けっこうあいた〔空白期間があった〕。次の仕事を決めてやめたわけじゃないんで。米軍の中に、大学があるんですよ。そこへ進学した。〔中にいるのは〕軍人、軍人〔ばかり〕。で、最初はゲイだけのバーとかじゃなくて、〔『BADI』の中の〕広告に載ってたところ。
《聞き手B》「ちからこぶレディおだまりサリーちゃん」ですか?
《Aさん》そう。それがいちばん最初なんですよ。
《聞き手A》ちからこぶサリーちゃん〔って何〕？
《聞き手B》いやあ、なんか、そんな名前〔のゲイバー〕なんだけど。
《Aさん》そうそう。
《聞き手A》すごい名前ですね（笑）。
《Aさん》それが自分の〔デビュー〕。でも、ゲイのひとがいるとかじゃなくて、ノンケのひとがほとんどだったような。

《聞き手 B》〔マスターを〕やってるのはゲイだけど、お客さんはミックスみたいな。
《聞き手 A》そのとき、仕事をやめたんですよね。仕事はなにかありました？
《A さん》米軍の大学にいってるので、それをメインにしてアルバイトをしたりしてました。沖縄のひとと、どうのこうのっていうのはなかった。
《聞き手 A》大学に入ったんですか？
《A さん》入るっていうか、英語が好きだったんで、もともと最初は英文科いったぐらい。卒業までは至らなくって、あと、また保険会社で働いたり、抑うつとした日々。ゲイバーとかにもいくんだけど、最初の 2 ヶ月ぐらいは楽しかったんだけど、沖縄ではうまくいかなくって、「30〔歳〕を前にしてこういう生活はダメだ」と。何も捨てるものがないっちゅうか、ちゃんとキャリアを築いてたわけでも〔なく〕、もちろん結婚もしてないし、貯金もほとんどなくて、〔東京行きを決意したのは〕今ぐらいの時期［＝11 月］に、誕生日がくれば 30 っていうときでした。

沖縄から東京へ

《聞き手 A》東京に？ ゲイ関係はどうだったんですか？
《A さん》ゲイバーとかにはいったけど、それで誰かと出会って付き合うとかはなかった。
《聞き手 A》その〔最初の 2 か月が過ぎた〕あとはどうされたんですか？
《A さん》沖縄でゲイバーデビューした後、4 年間ぐらいいかなくて、またなんか「やっぱりいきたいな」って、東京へ出るちょっと前に〔ゲイバーへいった〕。
《聞き手 A》特にそこでは、ゲイ関係で何もなかったんですか？ 出会いがなにかあったり。
《A さん》出会いっていうか、チラっと付き合いかけたひとはいたんだけど、それも自然〔消滅して〕。それとともに飲み屋にもまたいかなくなって、「ああもう、沖縄にべつになに［＝未練］もないから」って〔東京へ発った〕。
《聞き手 A》30 ぐらいのときに東京にいって、最初にいかれたのは？
《A さん》池袋。
《聞き手 A》池袋には何年ぐらいいらっしゃったんですか？
《A さん》池袋は、ツテとか、友達とかなかったんで泊まって、an とか、アルバイトの本で、寮付きってところを探したら、居酒屋が〔見つかった〕。寮もあったんで、応募して、その次の日から仕事。仕事はすごい大変で、大変だけだったらいいんだけど、働いてるひともすごい意地悪で。強烈に意地悪のすごいところで。寮だから、〔半ば監視状態にあって〕嫌でも働かないといけないんだけど、「もうやってられない」と思って、2 週間いたんですけどやめて。
「東京いったら、HIV の団体で働こう」っていう、ボランティアしたいっていうのがあって、『BADI』とかの後ろに載ってる〔団体を探した〕。で、最初「A」［＝同性愛の人権団体］とか、あちこち電話かけるんだけども繋がらなくて、「P」っていうのも載ってたんだけど、名前だけではイメージがわかなくて。「A」とか有名なところだったらまだ〔わかる〕。〔ほかに〕「H」　［＝HIV の人権団体］とかも〔わかるし〕。〔それで結局〕「どこにかけても電話とらないから、しょうがないや」って気持ちでかけました、そこに［＝P］。
〔電話を〕かけた日にたまたま、〔P の職員の〕I さんがいて、「ボランティアに興味あるんですけど」って。〔I さんは〕「事務所に話聞きにきて。場所も池袋から高田馬場で近い」って。行って話して、「実は住むとこもないんですが」みたいな。カプセルホテルにいたんです。寮を出てから。
《聞き手 A》30 ぐらいのときですよね？
《A さん》29 でした（笑）。
《聞き手 A》こだわるねぇ（笑）。
《A さん》で、話聞いて「ああ」って。知り合いが外国人アパートとかいって、「敷金礼金もいらなくて保証人もいらない、そういうのがいいんじゃないの」とかいって紹介してもらって、池袋の外国人アパートに住んで。
「P」に入ったことで、自分のゲイライフがすごい広がって、「ゲイの友達がほしいなぁ」と思ってたのも探せるし、世界が広がったっていうか、「P」に関わったことで、ゲイライフが充実した。なんか、できた恋人とかも、ぜんぶ「P」関係で。「何しに来たのか」って感じなんだけど、そうですね。
《聞き手 A》仕事は、何か探しましたか？
《A さん》仕事は、最初は日雇い。居酒屋やめてからは、日雇いっていうかなんか、引っ越しの仕事をしたりとか、なりふり構わず、とりあえずお金が尽きかけてたので、ペリカン便の仕事を。日払いだったんで。あと、イベント警備のアルバイトがすごい高かったんで〔やった〕。
《聞き手 A》そうすると、30 ぐらいまで〔日雇い派遣で〕？
《A さん》そうこうするうちに、自分は英語が好きで、英検 1 級とか持ってたんですよ。でも通訳とか、英語の仕事をしたことはなくて、ず

っとやりたいと思ってて。たまたま求人広告に通訳の募集なんだけど「未経験可」みたいな。こんな珍しい募集はない、って。普通、簡単な、通訳の中でもいちばん下が、募集あったんで、それを〔やった〕。

《聞き手A》ボランティアは継続してやってらっしゃいました？

《Aさん》ボランティアは、通訳の仕事をするようになってからは、定期的にはできなくなって。それ［＝通訳の仕事］は、地方にアメリカからエンジニアが来て、そのエンジニアと一緒に日本の工場にいって作業するって〔いう内容〕。東京じゃないんですよ、働く場所。日本全国、九州にいったり。毎週何曜日にボランティアにいくとかっていうことはできなくなって、空いてるときにいくみたいな。だけど、ずっと関わってはいたんですけど。

《聞き手A》ボランティア活動してたのは、どうでしたか？ いろんな出会いも増えたわけですよね。

《Aさん》もう、ここにきてなかったら、あのとき電話してなかったら、もっと暗い人生だったんじゃないかなって。すごい楽しくなった。沖縄にいるときは、中学までも、高校とかも、ひととあんまり、自分を出したくないっていうか。沖縄のゲイコミュニティにも、足を突っ込みかけて自分でまた引っ込んで。トータルで2ヶ月ぐらいしか飲みにもいかなくて、ゲイの友達っていうのも1人もいなかった。〔東京へ出てきて〕生まれて初めて、恋人も〔できた〕。

《聞き手A》全国を仕事で回るようになりますよね。それでとりあえず安定して。プライベートのほうはどうですか？

《Aさん》生活の安定といっしょに〔プライベートも充実してきた〕。最初付き合ったひとも「P」のひと、次に付き合った人もPの人で、すごい好き〔だった〕。でもそのひとは〔ほかのひとと〕付き合ってて、とりあえず自分の気持ちは隠して、別れた途端にアプローチ(笑)。

《聞き手A》そうすると、仕事もあるじゃないですか。けっこう大変な生活〔だったのでは？〕……

《Aさん》その［＝通訳の仕事をしている］ときはまだ、付き合ってなかったです。

《聞き手A》何年ぐらい付き合って、かつ、仕事がそういう〔飛び回らない〕仕事に？

《Aさん》仕事は、3年近くその通訳をやったんですけど、いったん沖縄に帰ってきたんですよ。2004〔年に〕。ずっと東京にいて7年ぐらいとかじゃなくて、いったん沖縄に帰ってきて。1999年に東京に〔越してきて、いろいろあってまた沖縄に帰ってきた〕。

《聞き手A》2004年っていうと、いくつなんだろう。

《Aさん》2003年の暮れに沖縄に帰ってきて、沖縄で語学学校に通って、通訳の講座があるので〔受けて〕。通訳のレベルとしては〔自分は〕低かったし、まだまだっていうか、東京に何年かいたら、単身だけだとちょっと疲れてくるところがある。

沖縄県がお金を出して通訳の学校に派遣する、学費も生活費もぜんぶ県が出す同時通訳者養成事業っていうので、「試験受けないか」ってその通訳の学校にいってるときに先生に話されて、また東京に派遣される。35〔歳〕から去年［2007年］の10月までいってた。

《聞き手A》で、また東京に派遣されて、どこに？

《Aさん》I〔＝語学学校〕って〔いうのが〕、虎ノ門にあるんですけど。あとは、練馬に住んでいた。

《聞き手A》仕事と生活が東京に戻りますよね。で、プライベートは？

《Aさん》東京にいったら必ず「P」と関わるので、また「P」で〔活動した〕。で、〔沖縄から〕戻ったぐらいに、自分が好きだったひとを、ちょっと、自分のほうから攻めたっていうか。一目ぼれだったんですよ、そのひと。

《聞き手A》今の仕事を始められたのは？

《Aさん》〔2008年の〕6月からです。

《聞き手A》〔沖縄に〕戻っていらっしゃって、ゲイ関係は？

《Aさん》それは、最初は沖縄のゲイコミュニティにかかわるつもりはなかった。去年戻ってすぐに、〔Pの〕Iさんから電話があって、「いま沖縄のゲイサークルの子がきてるんだよ」って感じで。「沖縄に帰ったんだから、なんかやったら？」みたいなことを言われて。ただ、沖縄に戻ってひと月ぐらいで、すぐに神戸に働きにいったんです。11、12、1〔月〕。去年の。10月に帰ってきたんだけど、11、12、1〔月〕は〔神戸に〕。神戸から沖縄に戻ってから、Iさんに紹介された沖縄のゲイ団体のイベントを手伝ったりしました。

《聞き手A》今、ゲイをやってることには満足ですか？

《Aさん》満足ではないです。っていうのは、両親と同居してるんで、一人暮らしもやって、同居する〔ようになる〕と、きつい。一人暮らしのときは、呼べますよね、恋人でも。もちろん同居ではそういうことは〔できないってこと

は〕、ないと思うけど。

(2)いまは、ゲイでも不自由はしていません。-沖縄に住む性的マイノリティ男性 T さんのライフストーリー-

T さんは、東京で生まれ、沖縄で育ったゲイ男性である。聞き取り時点で、24 歳。生まれて 1 歳になるときまで東京で暮らし、その後はずっと沖縄で暮らしているという。家族構成は、両親と姉、兄、そして T さんの 5 人。2 世帯住宅で、おじいさんとおばあさんもいるが、おばあさんは現在、高齢者施設におり、一緒には暮らしてはいないという。以前は、おじいさん、おばあさん、お母さんで地域の商店を営んでおり、お父さんはクレーンのオペレータをして生活をしていたが、おじいさんとおばあさんに介護が必要となったことから、商店は閉めたという。お姉さんとお兄さんはすでに結婚をしており、現在は別々に住んでいる。聞き取りは、2008 年 11 月に、那覇市 NPO 活動支援センター会議室で行った。聞き手は、加藤慶と金城健である。

サッカー好きな小学生時代

《聞き手》小学校入学前とかって、幼稚園とか保育園とか行っていました？

《T さん》幼稚園は行っていました。鮮明に覚えてる記憶は、先生に怒られてたことかな(笑)。悪いことしてつねられたりとか、弁当忘れたとか。〔弁当忘れて、〕周りの友達からちょっともらったりとか。それぐらいかな。

《聞き手》やんちゃ系〔な子ども時代〕ですか、そうすると。

《T さん》いやあ、どうなんですかね。もうみんな同じようなこと言い出して、周りの友達も〔やんちゃ系だったから〕。

《聞き手》そのときは何かこう、男の子と〔の関係〕は？

《T さん》いや、ないです。

《聞き手》小学校は地元？

《T さん》地元の小学校。自分なんかは、1 年のときと 2 年からの小学校が別々にあって、転校したというか、〔2 年にあがるときに〕学校が新しくできたんですよ。新しくできたから、途中からみんな転校になった。転入みたいな感じ。

《聞き手》そっちの、もともとの小学校に残っているひともいれば、新しい学校にいったひとも？

《T さん》いったひともいる。地域によって分かれますね。〔前の学校が〕歩いたら 30 分ぐらいのところで、新しくできた学校が 5 分ぐらい。むっちゃ良かったですね。

《聞き手》小学校を振り返って、印象に残っていることは？

《T さん》べつに〔印象に〕残ってることは、まあ、うーん。兄ちゃんがちょうど 5 こ上だから、同じ学校にきょうだいがいるっていうの。半分嬉しかったけど、〔その兄ちゃんに〕いじめられてたから、半分嫌でしたね。兄ちゃんと物の貸し借りをしてたから、6 年生の教室にいかないといけないんですよ。たまに「返してー」みたいな。そしたら、「ヤー〔＝沖縄弁の「お前」〕の弟か」みたいに兄ちゃんが〔兄ちゃんの友達に〕言われて、〔兄ちゃんは〕「違う」って。「じゃあ、〔俺は〕誰よ」みたいな（笑）。それが嫌だったけど、こういう絡みが良かったのかな、兄ちゃんに〔とっては〕。ある意味、きょうだいじゃないとこういう絡みできないじゃないですか。そのあとは絡みとか〔なかった〕、学校かぶることが絶対にないから。〔年齢的に〕姉ちゃんとは絶対にかぶらないし。

《聞き手》初恋っていつでしょうか？

《T さん》5〔年生〕か 4〔年生〕ぐらい。新しく学校移って、2 クラスしかないから、みんな友達なんですよ。

《聞き手》どれくらいの規模だったんですか、その学校って？

《T さん》1 クラス 30 名の 2 クラス。1 学年 60 名いたかなぁ、ぐらい。それで、仲良しだし、なんか、あるときくっついてくるじゃないですか、小学生って、男女でも。で、「この子はこの子」みたいな感じで一緒につるんでたら、たぶんあれが初恋だと思うんですけど。

《聞き手》同じ学年の女の子ですね。初恋だから、告白したってわけではない？

《T さん》しなかった。もうなんだろう、周りでくっついてるから、誰も告白はしないんですよ。「○○が××好きー」みたいな感じでくっついてってる、みたいな。

《聞き手》今でも会ったりします？

《T さん》そのひとにですか？ 同じ地域の集まりだったりとか、中学校も全部一緒だったんで、同期会とかだったらたまに顔見たりするぐらいだけど、全然いまは〔恋愛感情はない〕。「あ、このひと初恋なんだ〔っけ〕」みたいな。そのひとに対しては何もないですね。

《聞き手》そのとき〔小学校時代〕はとくに男の子には興味はない？

《T さん》ない。一緒に遊んでるぐらい。

《聞き手》「オカマだ」って言われたりとかもない？

《T さん》ない。ないけど、女の子と遊ぶのも男の子と遊ぶのもどっちも同じぐらい多かったんですけど、仲良い女の子とかいるじゃないですか。遊んでたらなんか、男子メンバーからはあんまりよく思われなくて。若干、いじめなのかな。いじめっぽいのはあったりしました。プリントぐじゃぐじゃにされたりとか。だけどべつに、必要ないプリントだったから。興味なかったし。

《聞き手》他の男の子は女の子とほとんど遊んでいないのに、〔T さんは〕遊んでるから〔いじめられた〕？

《T さん》そう。仲良いから、たぶん嫉妬なんですかね。〔嫉妬〕っぽい感じ。自分はそういうのあまり気にしてなかったから、周りの女子が、「やめれ」みたいに言って〔るけど〕、「別にいいんじゃん」みたいに、こっち〔自分〕は。当事者はべつにどうも思ってないみたいな。

《聞き手》どんな遊びしてたんですか？

《T さん》公園いって、みんなでおにごっことか、木登りとか、あんな感じ。〔男子も女子も〕同じ、みんな一緒に遊んでる状態。ちょうどいちばん近い〔場所にたまたまいた〕のが女の子だったりとかしたんで〔女の子とよく遊んでいるように見られた〕。小学校 4 年でサッカー部入ったんで、そのときはほとんど男子としか遊んでない、っていうか部活ばっかりだったから。

《聞き手》サッカー楽しかったですか？

《T さん》楽しかったですね。基本的にディフェンスずっとやってたんで、攻めてこられて、ボール取って、前のひとにパスして、前のひとがシュート決めてくれたら、それで全然嬉しかったです。ボールを奪いにいくのが好きでした。

《聞き手》それ〔部活〕は、学校内の？ 地域の？

《T さん》学校内の。〔当時〕できたばっかし。児童オリンピックってあるじゃないですか。あれで、〔校内に〕サッカー部がないから、立ち上げよう、みたいな。どんなことやったかな。みんなで 45 分の休み時間とかサッカーやってて、「やってるメンバーはみんなでサッカーやろう」みたいな。それで部活が始まった、みたいな。続かない子は続かない子でやめてったりとかして。児童オリンピックでみんなけっこう、陸上とかやり始めたりしたんで。

《聞き手》サッカー部、何人ぐらいいたんですか？

《T さん》何人ぐらいかな。普通に 2 チームは余裕で作れるぐらいはいたんで、22 名以上。でもやっぱ、二つ上の先輩がまだいるじゃないですか、6 年生までいるから。自分らの〔同い年の〕年がいちばん多かったですね。ちょうど担任のひとが、サッカー部の監督みたいな感じだったから、もう一つのその学年の〔クラスの〕子たちがいっぱい集まって、5、6 年の〔サッカー部にくる〕ひとは、サッカー好きなひと。そのとき〔90 年代後半〕、すごい J リーグ流行った時期だったから。サッカーゲームとかみんなやってるじゃないですか。あんなので、「俺もサッカーやりたい」みたいな感じで来て。めっちゃサッカー流行ってましたから。J リーグチップスとか（笑）。

《聞き手》今もサッカーはやってるんですか？

《T さん》今はやってないです。小学校だけです。中学校からは、親に「サッカーはやめれ」って言われて。兄ちゃんがずっとサッカー部だったんです、高校まで。今はたまにしかやってないけど。兄ちゃんけっこう怪我が多くて、タックルされて転んで上にひとが乗っかったりとか、足折ったりだとか。だから、〔母が〕すごい心配性なひとだから、「お願いだからサッカーやめて」みたいな感じで。サッカーと一緒に、小学校の 1、2 年ぐらいから剣道をずっとやってたんですよ。それで「なるべく剣道やって」みたいな。

《聞き手》じゃあ、中学校からは剣道部に？

《T さん》入ろうと思ったら、剣道部がちょうど潰れてて。それで「何部に入ろうかなー」って探してたら、友達に「テニス部立ち上げたいんだけど、人数〔あわせのために〕入ってくれないか」って言われて、他に〔やりたい〕部活ないからいった、みたいな。それでテニス部入って。

男友達に告白された中学校生活

《聞き手》地元の中学校ですか？ 何中？

《T さん》地元のです。N 中学校。〔1 クラスに〕30 か 40〔人〕ぐらいで、6 クラス。

《聞き手》中学校では恋愛はどうでしたか？

《T さん》中学校入って、違う小学校からも女の子が来たりするし、サッカーと剣道やってたから、違う小学校の子たちも、剣道が地域のクラブだったから、もともと違う小学校のひとでも知ってたりするじゃないですか。「同じ中学校になったねー」みたいな。で、女の子は、K 小学校っていうのがあって、そこの小学校はけっこうヤンキー率が高い。僕らなんかはめっちゃ平和なんですよ、A 小学校ってところは。B 小学校ってところも全然平和。〔中学校に上がって〕なんかヤンキーっぽいのが入ってきたから「すげぇー」みたいな。女の子なんかもスレてるっていうか、〔その当時の目線で見れば〕

大人っぽいイメージがあるじゃないですか、ヤンキーっぽいひとって。「あー、すごいかわいいなぁ」みたいな。
《聞き手》女の子ですよね？
《Tさん》そうですよ。全然、ゲイじゃないです。同じ学校〔出身の子〕は、全然。ずっと部活やってたんで。それより先輩にけっこう従いましたね。
《聞き手》でも中学校を振り返って、恋愛感情ってありました？ その先輩とかに。
《Tさん》恋愛感情自体がなかったから。「付き合いって何？」みたいな状態。「付き合って、何〔するの〕？」みたいな感じなんですよ、もう。それよりテニスとか剣道とかやってるほうがすごい楽しかったから、色恋の話はぜんぜん興味ない感じ。
《聞き手》クラスの普段の生活の中で〔色恋沙汰の〕話って出ることありました？
《Tさん》出なかったですね。進んでるK小学校の子たちは、「○○と××が付き合ってる」みたいな話は〔するけど〕、「へー」みたいな感じで終わるんですよ。
《聞き手》「男の子と女の子で付き合ってる」って話？
《Tさん》うん。
《聞き手》じゃあ、特に男同士とかそういうのは？
《Tさん》なかったですね。
《聞き手》中学校でいちばん思い出に残っていることはなんですか？
《Tさん》中学校で思い出すと、ああ、めっちゃ衝撃的なことありましたね。男友達に、コクられたって言えばいいのかな。中3の頃なんですけど、生徒会活動とかしてて、遅れて部活にいこうとしてたとき、部室へいったときに部室のドアのそばに友達がいて、「今からか？」みたいな話になって、「ああ、ちょっと遅れたから」って。「急いでいかないといけない」みたいな感じになって、その友達が普通に〔行く手を〕ふさいでくるから。それで、〔部室の〕鍵持ってるじゃないですか。鍵開けて入ったらそいつも入ってきて、「〔着替えて〕すぐ出るけど？」みたいな。そしたら、ババババってすぐ着替えてるうちに、後ろから倒されて。ズボンはいてたんですけど、上からこすられて。で、そいつは勝手にイって。
《聞き手》どう反応したんですか？
《Tさん》もう、意味がわからないんですよ。「はぁ？」みたいな。「何やってるか？」状態。そいつ、めっちゃガタイ良かったから。自分が超ちっさい、前ならえでコレ［先頭で両手を腰につける］の状態だったんで、かなうはずがない状態。で、もう、こすられて、そいつもズボンの上からこすってて、みたいな感じ。そいつは脱ぎもしないで、こすって、こすられて、〔1人で勝手に〕イって、何もなかったように普通に出てって。「はぁ！？」みたいな、全然意味がわからない。「何されたの、俺？」みたいな。エロ本とかも全然、見てたから、「こういう世界もあるんだ」みたいな〔ことを知った〕。そのときに初めて。
《聞き手》今、会ったりとかします？
《Tさん》全然会わないですね。
《聞き手》1回きり？
《Tさん》いや、そのあとも自分がトイレいくたびについてきて、しっこしてるときに後ろから、とか（笑）。
《聞き手》タイプでしたか？
《Tさん》タイプとかっていうレベルじゃなかったですね、もう。意味がわからないから。「何してるが？」みたいな感じ。「何してるのかな？」みたいな。「ひとくるぜー？」みたいな。嫌じゃないですか、自分もそう〔変態的に〕思われたら。

薔薇族事件

《Tさん》 ちょうどそれと同時期じゃないですけど、〔同性愛の雑誌の〕「薔薇族」が落ちてたんですよ、体育〔倉〕庫の〔近くの〕、部室のとこのトイレに。中学校の〔トイレに〕薔薇族が。で、みんなで、その時期ぐらいに、エロ本見てるときに、エロ本の中の伝言板みたいなのがあるじゃないですか。あれにホモって書かれてて、「ホモって何か？」って話になるじゃないですか。そのときに「男同士でやってるんだぜ」「へー」みたいな。で、エロ本では〔知識を得て〕知ってるじゃないですか。で、実際にいたじゃないですか。たぶんその人は、今はホモじゃない。ただ、ヌキたいだけ。エロビ〔デオ〕とか見て、「こんなのする」っていうのがわかるじゃないですか、自分たちだって。で、真似て〔やりたいんだけど〕、「女にやったら絶対問題になるから」ってことで、自分にやってきたのかな、って。今はそう思うんですけど。
「薔薇族」〔を見つけた〕のときは、すごいもう、てんやわんやですよ。トイレの前が、みんな〔集まって大混雑〕。みんな「すごいよ、すごいよ」って見に来るじゃないですか。見て、「へぇーっ」みたいな。「〔この学校にも〕いるよ、いるよ」〔って言いたい〕みたいな。言わなかったですけど。
《聞き手》その彼［先輩］が持ってきたのかな？

《T さん》たぶん違うと思う。なぜか中学のトイレに「薔薇族」が落ちてた、みたいな。衝撃的でしたね、それは本当に。

テニス生活に邁進した高校生時代

《聞き手》中学校を卒業して、高校に入りますよね。高校は地元ですか？

《T さん》隣の町です。隣町の、C 高校っていうところに。もうそのときも、部活ばっかりの状態。テニス部で。高校 1 年で、もう剣道は終了っていうか、そっからもう練習場所が遠かったんで、いけなくなって、テニスばっかりやって。

《聞き手》小学校から高校までずっと一緒に進学した子っています？

《T さん》まあ 10 数名しかいなかったですね。

《聞き手》高校入って、部活動しながら、男の子との関係ってどうでした？

《T さん》特に、普通の友人関係。

《聞き手》女の子とかは？

《T さん》同じ高校の女の子とは普通につるんで、違う高校の子と付き合ったりとか。

《聞き手》いちばん思い出になってることは？

《T さん》いちばんの思い出は、高 3 のときに〔仲良くなったひとがいて〕、高 1、高 2 ではけっこう〔普通に〕友達だったんですけど、高 3 のときに、クラスが隣になって、授業もかぶることが多くなって。合同授業みたいな、「成績が良い子は違うクラスで、その子たちより劣る子たちはまた〔別の〕」みたいな、2 クラスに分かれている授業があったんですよ。それで体育も数学も、国語の授業とかもかぶるようになって、教科が 1 教科の先生が〔どのクラスでも〕一緒だから、テストが一緒だった。で、一緒に勉強するようになって、自分のうち来て一緒に勉強教えたりとか。今でも仲良い友達なんですけど、それからけっこう仲良くなって遊ぶようになって、そいつ学校落ちたから、一緒にどっかいったりとか。

修学旅行もいかなかったんで。修学旅行が自由参加だったんですよね。軽く 10 万ちょっとかかる。東京とか北海道いったりするんで。「それよりは自分は〔学校外の〕テニスクラブ通いたい」って言って、テニスクラブに通わしてもらう資金にしてもらって。だから高校の思い出は、〔高 3 のときできた友達の話を除くと〕同じ高校のひとたちよりかは、違う高校のひととつるんで遊んでるほうが楽しかったかな、っていう。〔学校外の〕テニス〔クラブ〕のメンバーで遊んでるのが。

《聞き手》テニスクラブっていうのは、地域の？

《T さん》もう全然、友達同士で集まってテニスコート借りて、練習、みたいな。だから、部活にはいるけど、ほとんど顔出してない感じ。ランキングだったらけっこう上のメンバーで集まって、連絡取り合って、「今日〇〇で練習するから、来る？」「いくいく」みたいな。で、それぞれで集まって練習したりとか、そのほうが楽しかったですね。バイクは一応持ってたんで。原付だったんですけど。それでけっこう移動して、テニスクラブの上の［先輩の］ひとたちなんかとつるんでると、コーチなんかってもうけっこう年上じゃないですか、普通に。20 代のコーチとかもいたから、そのひとたちと遊びにいったりとか。

《聞き手》高校時代は楽しかったですか？

《T さん》学校生活が楽しかったかって聞かれたら、わからないですね。外でテニスクラブだとか、テニスクラブ以外の友達と遊んでるのが楽しかったんで。学校は、ただ行って勉強してるだけ、みたいな。部活もほとんど出てないし。昼休みに友達と、ちょうど新しくなって 4 階建ての校舎だったんで、4 階の誰も来ないところで、友達 4、5 名ぐらいでご飯食って昼寝したりとか。いちばん広いところで。それから、海が隣だったんで、階段のところいって、友達がタバコ吸い始めて、そこに一緒にいったりとか。たぶん僕は吸ってなかったと思いますけど。

《聞き手》ゲイだって自覚したのはいつごろですか？

《T さん》高校卒業して、専門学校入ってから。

《聞き手》じゃあ高校時代までって、自分を何だと思ってたんですか？

《T さん》そういう世界があるっていうのは知ってたけど、全然自分はそういうの〔性的指向〕はないっていうか、高校入ったら全然、そういうのはあったけど、忘れてるっていうか。そんな感じ。

《聞き手》スポーツのほう〔に夢中〕で、性のところには興味がない？

《T さん》ですね。オナニー始めたのも高校なんで、自分〔は性はあまり興味がなかった〕。ほんとにテニスにハマって、テニスばっかりやってる。飯も食わないで朝から夕方まで、夕飯抜き、みたいな。飯食うのも忘れるぐらいやってたんですよ。で、3 つ上の、〔学校が絶対に〕かぶってない、クルマもってる先輩なんかと夜遊びしたりとかが多かったから、学校の先輩とつるむっていうのが〔なかった〕。1 こ上の先輩が部活にいなかったっていうのもあるんですけど。

部活の先輩がいなかったから、〔学校外のクラブで〕2こ上と3こ上〔の先輩がいるという状況〕だったんです。それでも、「上のひととつるんでるほうが楽しい。同級生と遊んでも面白くない」って自分の中で覚えてしまって、同じ学校の同い年の子と遊びにいったっていうか、そんなのないんですよ。〔交流があるのは〕学校の昼飯時間だけ、とか。あとはもう、先輩と、学校のテニスの友達と遊びにいったりとか。遊ぶっていっても、テニスやってたんですけど。

《聞き手》じゃあ、性に関する違和感っていうのも高校時代は特になかった？

《Tさん》興味なかったです。

両親に反対された進路選択

《聞き手》進路選択で迷ったりとかはしなかったんですか？

《Tさん》中学校ぐらいから、体育の先生になりたいっていうのがあったんですよ。〔進路指導の一環として〕将来の夢とかいろいろ書くじゃないですか。そのときにもう、〔第1希望が〕「体育の先生になりたい」とか〔第2希望が〕「インストラクターになりたい」って。インストラクターっていうのもほんと漠然としていて、「なんかスポーツ教えたい」みたいな。高校だったら、テニスにハマってるから、「テニスのインストラクターになりたい」って。で、第3がないんですよ。もうこれ〔体育教師かインストラクター〕だけ、みたいな。自分の中で。だから、体大［＝日本体育大学］にいきたいっていうのがものすごいあって、だけどお兄ちゃんの大学生活を見てて、1、2年すごいダルダルだったんですね。それ見てて、めっちゃ大学いきたくなく〔なっ〕て。

《聞き手》お兄ちゃんは体育系の大学じゃなくて、普通の？

《Tさん》お兄ちゃんは普通の、沖縄の〔大学〕。沖国［＝沖縄国際大学］いってたんですけど、全然もう〔ダルダルで〕、「こんな生活したくない」って。それだったら専門学校いって、専門的な知識学んで、大学編入、って、まだ親には言ってなかったんですけど、「すぐ勉強したい」っていう。

《聞き手》じゃあ自分の中では専門学校進むときに、もう大学まで視野にいれて？

《Tさん》いれて、〔専門に〕入ってました。けど、親は夫［父親］が高校中退、おかんが高校いってなかった、かな。だもんで、「大学までいかせたい」っていうのがあったらしくて。最初は琉大［琉球大学］の教育学部の保健体育〔学科〕受けるって話をして、センターとかもめっちゃ勉強してたんですよ。だけど、進路選択なって、いろいろ考えて、福祉もやりたいってその頃にちょっと興味出して。おバア［＝おばあちゃん］が倒れたっていうのがあったんですけど。脳梗塞で倒れて。で、「福祉もやりながらスポーツも教えたい」ってなって。で、お兄ちゃん見てるじゃないですか。「大学いってたら無駄なお金も使うし時間も無駄だし」みたいな〔考えが〕あったから、専門学校でスポーツ福祉の専門学校探して、何件か探したんですけど、「内地にいくのはちょっと、勘弁」みたいなのがあって。

お母さんとお父さんに最初話したとき、めっちゃ反対されて。「なんで大学いかないの。大学いけ」みたいな。「なんでよ」みたいな。めっちゃ喧嘩して。おとう［＝父］に話しても埒があかんと思って、おかあ［＝母］に話をして。おかあも最初めっちゃ反対って、もう、〔俺は〕部屋に立てこもり。親がいる時間、絶対に部屋から出ないで、学校いくときも、ベランダから出て学校いって、みたいな。絶対見ないように。で、もう、一週間ぐらい〔そういう生活を続けた〕。でも、話さないと、お金出してもらう立場だから。勝手に学校説明会いったりとか、全部調べて、お母さんのほうに最初、報告を。で、「兄ちゃんみたいにはなりたくない。あんなダラダラした生活したくない。すぐ勉強したいし」つって、ぜんぶ学校の説明とかして、「こうこうこうで、こういう資格取れる」とかって。

お母さんは「もともと『あんたがやりたいようにやりなさい』って〔言ったから云々〕」〔って言った〕。最初反対されたから、「なんだよ、親、言ってること違うし」みたいな話して、お母さんは納得したけど、お父さんには自分から話しなさいって言われて。めっちゃ嫌で、それが。「味方に付けるために話をしたのに、どうしよう」みたいな。で、どうにか話して、そのときに「大学編入もできるから」って条件で、「大学院もいきたい」っつって、いきたいけど、大学1年の一般教養は高校の勉強って話をいろいろ聞いてたから、「いま高校の勉強をちゃんと真剣にやってるし、成績もそんなに悪くないから、すぐ専門の勉強したい」っつって。中学校のときにも、体育科のある学校に進もうとしたら、反対されて普通科にいった状態だったから、これだけはもうどうしても自分がいきたいところいきたいと思って。で、お父さんに話をして、どうにかこうにか認めてもらって。もう〔進路指導の〕先生も二の次だった。先生に話したら、「いや、それでも受けなさい、受けなさい」だったから。それでもう、3年のとき

の先生がめっちゃ嫌いになった、すごく。「お前のノルマのためだろ？」とか思ってしまって。「なんで自分の進路、自分がちゃんと決めて調べてきてやってるのに、自分がもう大学受けないって決めてるのに、なんでこんな勝手に進めるの、なんで自分が決めたことを後押ししてくれないの」と思って。

だからさっき話をしたみたいに、「外に出たい」っていうの、それもあるんですよ。「いろんなものを視野に入れておかないと、もし教員になったときに、この〔受け持った〕子たちにいろんな道を後押しできない」っていうのがあるから、外に出たいし。この〔ゲイの〕世界入ってよかったなっていうの、それもあるんですよ。ゲイの世界に入ったのも、それはそれでよかったかなって。ストレートな時期もあるし、そういう〔ゲイの〕世界があるのもわかるし。他の普通の体育教員よりかは、セクシャリティ的には全然、幅広いな、自分、みたいな。っていうのは、すごい得してるなっていうのがあるんですけど。今になって〔思うこと〕ですけどね、それは。

《聞き手》専門学校の受験を認めてもらったわけで、受験して、合格されたんですね。

《Tさん》面接だけだったんですけどね。

《聞き手》受かったあと、両親はどうでした？

《T さん》一応、そこそこ成績は県でベスト16 ぐらいには入ってたから。スポーツ特待生で入ろうとしたら落とされたから、それ以外で受かって、内定通知は出てたんですよ。「特待生取れなかった、ごめんなさい」みたいな話で。それでもう、お父さんはひたすら「はぁ、大学いってほしかったなぁ」みたいな嫌味を僕、ずっと言われて。シカト（笑）。お母さんは、「いったからには頑張りなさいよ」って。

《聞き手》で、4月に入学しますよね。何年間の学校ですか？ 楽しかった？

《Tさん》2年間。もう、超楽しかったですね。勉強もほんとに自分が興味あることをやるし、友達もみんなそれで集まってるひとたちだから、とても学習意識も高いから、勉強環境すごいよかったんですよ。前の席を取り合い、みたいな。

《聞き手》友達環境も充実してたんですね。

《Tさん》すごい良かったですね。そこの友達と普通に遊びにいったりもしてました。

女性と男性へ両方向く性的関心

《聞き手》プライベートのほうはどうでした？

《Tさん》うーん。高3〔の卒業〕までの間に彼女できたりもしたんですけど、あんまり興味なかった。「一緒にいたのも、そういう関係なんだろうな」と思って。相手に悪いと思って、コクったりして一緒にいる、みたいな感じだったんで。高3でもう、部活も引退じゃないですか。同じ〔学外の〕テニスクラブの違う高校の女の子と付き合うようになって、高3の就職活動時期ぐらいからテニスのインストラクターのバイト始めてたんで、今度は〔その女の子が？〕レッスン生って形になったんですね。

で、レッスン生と付き合ってて、専門学校入って、あっち〔彼女〕は沖国〔沖縄国際大学〕いって、自分は専門〔学校〕いって、そうすると〔生活〕時間合わなくなって別れて、たまたまその時期に、スポーツ科学で体の勉強とかいろいろするじゃないですか。病気の勉強とかもしてるときにエイズの〔ことに触れる機会が〕あって、ネットとかで調べるじゃないですか。そこでまたゲイっていうのが出てきて。

8月ぐらいからレポート作成してるときに、友達が出会い系サイトで騙されてお金振り込んじゃったんですよ。それですごい「出会い系ってこわいね」みたいな話になってて。「男と女が会う」っていうのはすごい簡単な話だと思ってたんですね。携帯が普及してるじゃないですか。で、エイズの勉強してるときに「ゲイ」ってキーワードが出てきて。「同性愛者の感染率がすごい高いですよ」みたいなのをやってるときに、「そのひと〔エイズに感染しやすい同性愛者〕ってどんなひとなんだろうね」みたいな話を友達とするときがあったんですよ。そしたら、友達が出会い系サイトで騙されてるじゃないですか。「〔ゲイにも出会い系が〕あるんじゃん？ ネットで探してみる？」みたいな話になって。

探してると、めっちゃすごい数がヒットして。「へぇーっ」みたいな。「こんな〔ゲイの〕世界があるとは知ってたけど、〔規模が予想以上に〕すごいなー」みたいな話になって、ひとつのサイトを開いて。文章だけのやつ。「今から会いませんか」的な、掲示板みたいなのを見て「きっと〔今ごろ実際に〕会ってるんだー」って。それから、〔自分がゲイだと〕意識しはじめたわけじゃないんですけど、ちょいちょい友達と見るようになって、「すごいなー」みたいな。ひとりでも見るようになって、〔そのとき既に〕彼女と別れてるから、たまーに、すごいヌキたい衝動が出て。

掲示板見てて、なんか一方的〔にヌイてもらう〕みたいな話がよくあるじゃないですか。男に対してそういうの〔とくべつ男としたいという欲望〕もなかったんですけど、「ヌイてもら

えるならべつに、〔男でも女でも〕一緒かな」みたいな感覚で見てて。

最初はもう、メッセージが送れないんですよ。怖くて。どんなひとが来るかわからないし。初めてメッセージを送ったときに、自分が想像してたゲイの最初のイメージがあって、若干太ってて、老けてて［＝中年で］みたいな。そういうイメージがすごいあったんですよ。で、まあ、かぶってた、みたいな（笑）。「やっぱこんなもんなんだー」みたいな感じで。掲示板の使い方も全然わからない状態。で、ヌイて、「こんな簡単に会えるんだ。ヌキたくなったらこれ使えばいいじゃん」みたいな感じの感覚［＝ゲイとの付き合い方］、最初は。その間に彼女できたりとかして、そのとき［＝彼女がいる間］は全然使わないんですけど、専門〔学校〕1年のときに、彼氏ができたのかな、初めて。〔ゲイといったら〕おじさんなイメージがあったけど、初めて同い年の子と会って、「若い子もいるんだ」ってなって。その子とは一切そういう［＝性的な］関係はなかったんですけど、「ゲイってさー、こんな［＝太った中年というようなステレオタイプなイメージそのままの］ひとしか〔ほとんど〕いないんじゃん？」みたいな話してたら、「むっちゃカッコいいひといますよ」みたいに言われて、「あ、マジ？ 会わして、会わして」みたいな。興味あるじゃないですか。そういうやりとりしてて、教えてもらって、〔紹介されたひとと〕やりとりするようになって。

相手〔＝彼女〕には、すごい失礼なんですけど、男と付き合うってことにすごい興味が出てきてしまって。あっちがすごい自分に好感を持って接してくれたから、興味で付き合ってしまった〔のに罪悪感を覚えた〕。その「興味」が「好き」なのか何なのかわからない状況で付き合ってたから。「興味」が「好き〔と同じもの〕」って勘違いしたのかな、たぶんそのときは。で、付き合って、男と付き合うってすごいさっぱりしてる感覚だと思ってたんですよ。べつに自分が彼女いたときも、「友達と遊びにいく」〔って言う〕と「うん、遊びにいけば？ 自分といるときは自分と一緒にいるからべつに」みたいな感じだったから、男もそんな感じ、みたいな〔ふうに思っていた〕。女のひとよりすごい、自分が「遊びにいく」って言ったら「は？ 誰と？」みたいな、そんな〔執着が強い〕のが多かったし、「今日一緒に遊ぼう」みたいな〔誘い〕が多かったから、自由っていうか、若干束縛〔されてる〕みたいな感じじゃないですか。

「男と付き合う」っていうイメージが、自分の中では友達と遊びにいくなら「遊びにいけば？」〔って快く送り出してくれる〕みたいな、束縛っていうのがない状態、っていうイメージで、楽に、友達みたいな感じで付き合っていくっていうイメージがあって。自分の勝手なイメージで。〔いざ実際にゲイのひとと〕付き合ったら、すごい束縛されて。「はぁ？全然違う」みたいな。で、エッチも面白くなくて。初めてヤられた感じ。穴を。全然気持ちよくないし、痛いだけだし、「こんなんだったら男と付き合わないほうがいいし」みたいな。気持ちよくないエッチして、面白くないじゃないですか。「こんなもんなんだー」みたいな。半年近く付き合ってたけど、〔付き合いはじめて〕2ヶ月ぐらいから「このひとのこと〔本当に〕好きなのかな？ 好きじゃないかも」みたいに考え始めて。でも半年だらだら付き合って別れて、今ではたまに連絡とったりするぐらい。やっぱ初めての彼氏だし、〔今も〕友達なんですけど。〔ゲイ〕専門で始めてそういう関係を持った〔のがそのひと〕って感じですね。最初は、自分の知らない世界ばっかりだから、楽しかったっていうのはありますね。

《聞き手》そのひとにいろいろ教えてもらったって感じですか？

《Tさん》〔ゲイ関連の〕サイトとかいろいろ見せてもらったりとか、動画とか見せてもらったりとか。

《聞き手》じゃあ、専門学校時代では、プライベートは充実してました？

《Tさん》してたと思いますね。学校も楽しかったし、バイトも。何回かバイトのことで悩んで沖縄から逃げ出したこともあったんですけど。内地に半月ぐらい。2年のときになったら、もう〔ゲイの出会い系〕サイトも〔ルールやマナーを学んで〕ちゃんと使えるようになって、内地の〔ゲイの〕ひとが来たときに一緒に遊んで、仲良くなって、そのひとのうちに泊まりにいったりとか。〔ゲイの〕カップルとなるべく仲良くなって。そしたら〔恋愛や肉体の〕関係を持つことはないじゃないですか、絶対に。で、向こう［＝内地のゲイのひとのうちに］いって、泊めてもらって、一緒に遊んだりとか。

《聞き手》それは何歳ごろ？

《Tさん》19か20歳ぐらい。

《聞き手》専門学校に2年間通って、大学に2年次編入だから、大学生活は3年間ですよね。大学に編入してみて、どうでしたか？

《Tさん》勉強が、専門〔学校〕のときに比べて、やってるひととやってないひとがすごい分かれるし。「何しに来てるんだろう、このひと

たち」みたいな。専門学校って、自分なんかの〔通った〕学校が特別だったと思うんですけど、勉強しに来てるひとが多いから。［編入して］M 大学いってたんですけど、レベルの低さがすごい。自分の中で「教員免許取るだけのために来た」って自分で割り切って、それ以外は学校にいない。だから、学校生活っていうのがよくわからないですね。「キャンパスライフ楽しいよ」ってみんなに、大学いってるひとから言われてましたけど、「どこが？ 全然面白くないし」みたいな。

《聞き手》大学を振り返って〔恋愛関係での〕男性関係はどうでしたか？

《T さん》大学いって初めて、男も女も含めて、同じ場所での恋人っていうのができたんで、すごい楽しかったと思う。

《聞き手》彼女もできたって聞いたけど?

《T さん》〔その話に出てきた〕彼女は、〔同じ大学とは〕違います。同じ大学生でできたから、楽しかったっちゃ、楽しかったかもしれない。

《聞き手》どれくらい続いたんですか？

《T さん》そのひとも 3 ヶ月ぐらいしか続かなかった。相手が、「すごい自分がフリーな感じだったんで、好きなのか不安になる」って。テニスの練習を、1 時間の練習のために名護じゃなくて那覇にずっといってたんで、頻繁に那覇にいくもんだから、連絡はしてるけど、何してるかわからないじゃないですか、あっちからしたら。それで、まあ、〔不満が〕あったのかな。

《聞き手》大学ではゲイ関係で何か困ったことってありますか？

《T さん》大学内ではべつに、そういうのやってなかったんで。ほぼ一人暮らしだったんで。実家にも月 1 回帰るぐらい。那覇にいっても、実家寄らないで帰る、みたいな。

《聞き手》女の子にはもう全然あれ〔＝興味ない〕ですよね。

《T さん》あれ［＝興味ない］ですね。このときに、僕一人暮らしだから、専門学校の友達を［沖縄］中部から呼んだりとかして、「この日飲み会します」みたいに飲み会企画して、じぶんちでめっちゃ飲み会してたんですよ。パーティーっていうか、人集めてワイワイするのが好きなんですよ。お酒飲まなくても。〔そのために〕買い出しいったりとか、そういうのが好きで。で、〔ある日〕集まったときに、女友達に、専門学校のすごい仲良い友達だけど、すごい自分の中で壁があった〔ひとがいた〕んですよ。「言えない部分がある」っていうのがあって、専門学校卒業のときに、卒業旅行みたいなのをみんなでしたときに、女友達に、自分の幼なじみの彼女と同じ学校だった子がいたんですよ。自分の前の彼女を知ってる女の子。同じクラスだった、みたいな。その子に「俺はさぁ」みたいな、初めてカミングアウトしたんですよ。「ゲイっていうか、男もいける、バイセクシャルなんだよね」みたいな。

その女の子はすごい、自分の彼女のことも知ってるし、その〔卒業旅行に〕いった日って、彼女とよりを戻した日だったんですよ。全部、ほとんど彼女とか話は知ってるから、この子には隠しても自分的に面白くないな、と思って、みんなで飲み会ワイワイしてるときに「ちょっと来て。実はさ」みたいな。「彼女、知ってるの？」みたいな。「いや、言うわけないよね」みたいな。

でもなんか、こんな［ふうに］して自分がちゃんと話せない部分があるっていうのが自分の中でちょっと嫌だったから、この女友達がすごくわかってくれる友達で〔よかった〕。わかってくれるといっても、〔こちらからもあまり〕すごいことは言えなかったんですけど。自分の中でも、「あなたが認めてくれなくてもべつに自分は〔よくて〕、迷惑かもしれないけど話して自分のことがわかってもらえばよかった」みたいな。自分の中で壁をなくしたいっていうのがあって、話をして、全然その女の子は「そうなんだぁー」みたいな、驚き。

専門学校のよくつるむメンバーは、何名かにカミングアウトして、両刀扱いされてましたね。けど、〔ゲイというかバイであることを〕知ってる男友達でも「彼女作らんがー？」みたいに普通に話してくるし、全然、環境は何も変わらなかったですよ。最後に自分のうちで飲み会したときに、すごい自分が好きで付き合ってた彼氏がいたんです。自分が初めて、「このひとのことが好きだ」って思って付き合った彼氏がいて。〔男友達は〕みんな、彼女ができたりとかしたら「彼女できたってばー」って紹介してくれたりとかして、恋を共有してたんですよ。自分も共有したい、けど、〔自分は男なのに相手は〕「男」っていうのを、どうしても言いたいけど言えない、っていうのがあって。

でも、その女の子に「話をしたいけどみんなに壁があって話しきれないし、自分の中でも隠してるのも嫌」って話をして、2 人でずっと話をしてたんですよ。「たぶん、こいつらは大丈夫だよ」って言って、この女の子が言ってたのは、「『T 君が好きなんだったら、べつに男でも女でもいいんじゃない？』ってみんな言うと思うよ」って言って。その女の子も、「T 君が好きだったら自分はいいと思うし」って言って

くれてたんですよ。で、飲み会を企画して、「この日に言おうね」みたいな話をしてたんですよ、その女の子と。

「ちょっと話したいことがあるってばー」みたいな話をして、「こうこうこうで、みんなのことすごい大好きだし、友達だと思ってるけど、1個だけすごい引っかかることがあったから」って話し出して、「はぁ、なになに？」みたいな、みんな飲んでるけど真剣に話を聞いてくれて。「じゃあさ」って言って、簡単に言ったらセクシャリティの最初の段階の話をして、「みんなもエイズの勉強とかしてるし、そういうのはわかると思うけど、レズビアンとかゲイが色々あるんだよ。その中にバイセクシャルっていうのがあってさ。みんなは両刀使いっていったらたぶん分かりやすいと思うけど。ヘテロ・バイ・ゲイ・レズで言ったら、その中で自分はバイのほうにあたるわけよ。なんでこんな話をしたかというと、このひとが好きになった。なんだろう、人間性にすごい興味をもって、〔好きに〕なったひとがいて、そのひとが男なんだよね。みんなワイワイして楽しいし、みんなも〔彼氏彼女のこと〕話してくれるけど、自分は話せないっていう、すごい壁があって、若干寂しい部分もあった」みたいな話を。

驚いてるひともいるんですよ。いちばん仲良いやつで、彼女の話しかしてないやつもいたから。「いや、女の話しかしてなかったし、俺にー」みたいな。「若干、男のひとのことをかわいいって思ったときもあったんだよ」みたいな話をしたりとか、「悩みがあって」とかいう話もして。友達なのに、みんな号泣するの、そのときに。泣きながら話をして。「ああ、やっぱこいつらに話をしてよかった」って思って。みんな、その女の子が言ってたように、「T君が好きだったら、自分なんか全然、歓迎するし、来たとき会わせてくれたらいいよ」みたいなこと言ったから。今でもみんな、専門学校のメンバーはみんな仲良くて、忘年会とかで毎年1回会うんですけど、けっこう人数集まるんですよ。

《聞き手》専門学校の友達のほうが、大学の友達より？

《Tさん》より、深いですね。共有した時間が、すごい濃い。実習にしろ何にしろ、みんな一緒に動いてたから。

《聞き手》今、お仕事したり、大学行ったりとかした中で、不都合はなかった?

《Tさん》んー、特にはないんですけど、まあ、職場では女の子に「ずっと彼女いない」とか〔話題が〕なったりしたときに、そういう話は出るじゃないですか。笑って過ごすんですけど、若干、「〔そのケが〕あるんじゃない？」って本気で言われたりすることもあったりとか。だから、ちょっとびっくりしますよ。

それとか、周りに若い子で中性的な子が増えてるじゃないですか。男なのに女の子みたいな子がすごい増えてるじゃないですか。IKKOさんだとか、色々出てきて、番組でも「おネエMANS」とか、色々やってるじゃないですか。ああいうのがあって「世間にもそういうひとがいる」ってすごい広まってきてて、職場で色々お客さんと話をしてるときに「そういうひとが増えてるんだよね。若い子でもすごい多いんでしょ、今？」みたいな。自分がいま彼女いないって〔ことを〕、お客さんでも知ってるひとだったら「そうなの？」とかって、急に〔話を〕振られたときに、ちょっとびっくりする。本当に。極端に反応しすぎたら〔変だし〕。反応の仕方がちょっとよくわからない。

《聞き手》お客さんのほうから「オカマなの？」っていうような？

《Tさん》「男好きなんじゃないの？」みたいな。どう反応していいかがわからないときがあるんですよ。過剰に「違いますよ！」って言うのか、「そうかもしれないですねー」って言うのか〔どちらが正解に近いかわからなくて〕、反応に困るときがあったりとか。

《聞き手》〔今のお仕事は〕スポーツクラブのインストラクター、だよね？ 楽しいですか？

《Tさん》そうですね、楽しいですよ。全然、もう。いろんな年代のひとがくるし、いろんな話が聞けるし。いえが1人暮らしから実家に戻ってきたぶん、いい感じになった男性をおうちに呼びづらい。呼んだとしても、先輩って形ですね。「先輩がちょっとパソコン使いたいから来てる」とか「遊びに来てる」って形で。頻繁に来た場合、親が怪しむ。

《聞き手》親はまだ何も知らない？

《Tさん》何も。まあ、親には、専門学校の女友達とよく遊びにいくんで、「○○〔＝女友達〕と遊びにいく」っていうふうに〔話を〕作ってるんで。そういうふうにめっちゃ隠してるところがあるんですけど、たぶん〔カミングアウトの形で〕言うつもりはないんですけどね。

《聞き手》いまは自分のことをゲイだって思いますか？ それともバイセクシャル？

《Tさん》今は、ゲイ。

《聞き手》ゲイということで人生を振り返って、満足してますか？

《Tさん》今は完全に、完全にというか、ゲイ寄りって言ったほうが正しいのかもしれない

んですけど、気になる、興味をもつひとが今は男のひとなのかな、っていうのがあるんですね。「このひとを好きになる」っていう。「べつに『男のひとを好きになってる』っていう感覚じゃないのかな」って、たまに考えたりするんですね。「どうなんだろう、これは」って。男に興味があるのは確かじゃないですか。興味はありますよ、やっぱり。けど、好きになるとか、付き合ったりするっていうのは、みんながみんな「男だから興味がある」とかじゃないのかなぁ、と。「このひとだから好きになってる」のかなぁ、と。まだ自分でも全然わからない。自分の気持ちがどういうふうになってるかが、全然わからなくて。でも今は、男のひとにすごい興味があるからこのゲイの世界で遊んでるし、そういう友達もある程度、18 からもうこの世界入って、友達もある程度できてきて、仲良くなってるひともいるし、全然、不自由してないって言ったら全然、不自由はしてないですよね。全然もう、深い話のできる友達もいるんで。満足はしています。

D. 考察

本調査は、沖縄県において生活する男性同性愛者当事者 2 名からライフストーリーを聞き取り調査したものである。そこで語られるライフストーリーには、友人たちや進路選択の関係の中で、現在まで生きてきた人生そのものが読み取れる。

E. 結語

今回は、研究倫理の観点から、2 名の方の聞き取りのみを掲載したが、日本社会学会倫理規定にもとづく研究指針に従ったうえで、研究倫理に関するデータ処理をさらに行い、今回掲載できなかった方たちのライフストーリーをも含んで研究を継続し、沖縄の特徴をより明確化していく作業が必要であると考えられる。

F. 発表論文等

なし

分担研究報告

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
沖縄県における男性同性愛者へのHIV感染予防介入に関する研究

MSM当事者団体「なんくる」との協同による医療アクセス不安の軽減に関する研究

研究分担者：健山正男（琉球大学大学院医学研究科感染病態制御学講座）

研究要旨

沖縄県のHIV/AIDS報告数は増加傾向にあり国より重点対策地域に指定されている。県内の保健所におけるスクリーニング検査体制や拠点病院でのHIV診療体制はこれを受けて十分な整備を構築してきたが、一方で主たる感染経路であるMSMへの直接的な情報発信に関してはその窓口が無かったために介入することが困難であった。今年度より県内MSMコミュニティ当事者団体「なんくる」が創設されたことを受け、今回「なんくる」を通してMSMコミュニティへの情報発信を行った。これにより医療、行政に加えて当事者団体との連携確立の一歩となった。

A.研究目的

沖縄県のHIV/AIDS報告数は年々増加傾向にあり、厚生労働省エイズ発生動向委員会によれば平成１９年度の人口１０万人あたりのHIV陽性者数は東京に次いで全国２位であった。感染経路の大部分は男性同性間であったことからMSM対策の重要性がこれまで指摘されてきた。本県では行政の努力により保健所でのHIV抗体検査数は全国１位であり２００４年以降HIV無症候性キャリア報告数はAIDS報告数を上回った。しかしながら、拠点病院でいわゆる“いきなりエイズ”で入院となった症例の中には、過去にHIV抗体検査歴が一度も無く、身近な問題としてとらえなかったことが示唆されるケースがあり、予防啓発の情報が届きにくいhard to reach populationの存在が考えられた。さらにMSMコミュニティへの聞き取り調査で、HIV陽性となった以後、安心して県内で医療を受けられるか情報が乏しく検査をためらうといった声も聞かれた。

今年度から県内MSMコミュニティの当事者団体として「なんくる」が発足したことを受け、同団体主催のイベントを通してHIV/AIDSの情報提供、拠点病院の診療体制紹介を行うことで、医療アクセスへの不安感軽減を計り、HIV抗体検査受検への動機づけを試みた。

また、県内医療機関とMSMコミュニティの信頼を相互により増すことで、HIV/AIDS医療体制への安心感を提供し、それによりHIV抗体検査への抵抗感を軽減させることを目的に、HIV陽性者や琉球大学医学部附属病院や沖縄県立南部医療センターのスタッフの協力を得て、「なんくる」とともに手記集を作成した。この手記集には、県内HIV陽性者当事者の手記やMSM当事者の手記などとともに、医療者のメッセージを含むものであり、2000部を作成してMSMコミュニティや医療関係者への配布をしている。

B.研究方法

「なんくる」が定期的に那覇市において開催している映画上映会(Our theater)において、上映会終了後にHIV/AIDSに関するトークイベントを行った。行ったのは平成21年１月である。トークイベントの内容は、抗HIV療法の進歩や抗体検査を受ける意義、県内拠点病院診療体制の紹介である。

本県においてこのような取り組みは初めてであったことや、MSMに限定されたイベントに医療従事者が参加するということ、研究目的が医療従事者への不安感軽減であったことの配慮からアンケートなどの調査介入は取り入れなかった。

C.研究結果

２００９年１月１８日、那覇市内のクラブハウスでトークイベントを行った。３５名の参加者があった。

D.考察

県内医療従事者とMSM当事者団体が協同してコミュニティへ直接HIV/AIDSに関する情報提

供を行うことができたことに意義があった。

本県では拠点病院の診療整備や行政の保健所における HIV 抗体検査事業の推進など医療、行政での体制は確立されてきた。しかしながらリスク層である MSM への情報発信に関してはこれまで直接に働きかける窓口が存在しなかったため困難であった。さらに地方では MSM コミュニティの閉鎖性や規模の小ささから当事者への介入は慎重を要する。その観点から今回、「なんくる」を通して MSM コミュニティに向けた情報発信を行うことができたことは医療、行政、当事者間の連携確立への一歩と考えられた。

E. 結語

当事者団体「なんくる」との連携をとることで相互連携確立がはかられた。MSM コミュニティへ直接 HIV/AIDS に関する情報提供を行うことができ、さらに手記集の作成により、医療アクセスへの不安軽減をはかることができた。

F. 発表論文等

なし

研究成果の刊行に関する一覧

刊行物なし